

■ バーンスタイン／交響曲第 1 番「エレミア」

バーンスタインはアメリカ生まれ、アメリカ育ちだが、両親がウクライナからやってきた移民で、ロシア系のユダヤ人である。シリアスな傾向の作品を代表する交響曲 3 曲のうち、第 1 番と第 3 番は彼の出自としてのユダヤ人の信仰や伝統をテーマに作曲された。「エレミア」とは古代ユダヤの預言者。交響曲第 1 番はバビロニアによるエルサレム攻略とバビロン捕囚の顛末、そしてエレミアの哀歌を表現している。

バーンスタインは 21 歳の夏、「ソプラノと管弦楽のためのエレミアの哀歌」を作曲した。その 3 年後、これを手直して終楽章に据え、ニューイングランド作曲コンクールに応募するべく、急いで書き上げたのがこの交響曲である。コンクールでは入選しなかったが、フリッツ・ライナーがピッツバーグ交響楽団で初演するよう、計らってくれて、1944 年 1 月、自らの指揮で初演した。この時期、ちょうどナチスがユダヤ人を虐殺していたことを想起すると、この作品の意味はさらに重く感じられる。

第 1 楽章「預言」（ラルガメンテ）はティンパコと弦楽器の不協和音に導かれて、ホルンがユダヤ教の朗誦のカデンツに基づく主題を呈示する。バスクラリネットなど低音を出す木管楽器が「預言の主題」と呼ばれる短い主題を呈示する。中間部（モルト・カルマート）では第 1 主題を変形したテーマが現れる。再現部になると、まもなくエネルギーがなくなり、弦楽器の保続音の上でクラリネットが冒頭の主題を奏でて終結する。第 2 楽章「冒涇」（ヴィヴァーチェ・コン・プリオ）は野蛮なスケルツォ楽章。エレミアの預言に耳をかさない異教徒の祭礼である。フルートとクラリネットが 2 オクターブ離れたユニゾンで静かに奏でるメロディは、安息日の聖書、とくにハフタラ朗誦のモチーフに基づいているという。やがて第 1 楽章のモチーフが用いられ、クライマックスに導く。第 3 楽章「哀歌」（レント）はメゾソプラノが「エレミアの哀歌」を、アシュケナジムたち（東欧のユダヤ人）の詠唱旋律で歌い始める。哀調を帯びたモチーフを繰り返しながら、冒頭旋律のユニゾンに至り、静かに終結する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート 2、オーボエ 2、イングリッシュホルン、クラリネット 2、

バスクラリネット、ファゴット 2、コントラファゴット、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、スネアドラム、バスクラリネット、シンバル、ウッドブロック、ピアノ、弦五部、独唱メゾソプラノ

※スコア上の表記